慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奥野信太郎先生年譜
Sub Title	Profile of professor Shintaro Okuno
Author	藤田, 祐賢(Fujita, Yūken)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.3 (2019.) ,p.75- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥野信太郎先生没後五十年記念特集号 特別寄稿
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20190329-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥野信太郎先生年譜

明治三十二年（一八九九）
十一月十一日、陸軍大尉奥野幸吉（後、陸軍中将に至る）の長男として、当時の東京市麹町区紀尾井町三番地で出生。母は子爵橋本綱常（橋本左内の実弟）の長女政子。命名は軍人勅諭中の信義の信をとってつけられた。
明治三十三年（一九〇〇）一歳
父が北清事変に出征したため、麹町区山元町三丁目四番地に移転。
明治三十五年（一九〇二）三歳
妹礼子出生。
明治三十六年（一九〇三）四歳
番町尋常小学校附属幼稚園に入園。
明治三十七年（一九〇四）五歳
麹町区平河町六丁目二番地の借家に移転。まもなく四谷区仲町原田某の持家に移転した。この年弟武次郎出生するも翌年病死。
明治三十九年（一九〇六）七歳
番町小学校に入学。赤坂区青山南町六ノ十四番地に移転。外祖父橋本綱常の平河町の自邸で竹添井々から漢籍の素読を受けるよう命ぜられた。これはたいそう苦痛であったという。
明治四十一年（一九〇八）九歳
赤坂区青山北町一ノ八番地に移転。弟、素三（もと）出生。素読は続いた。
明治四十二年（一九〇九）十歳

二月十八日、綱常死去。素読から解放されたが、またまた市ヶ谷加賀町に住む某漢学先生のもとに通わされ、その先生の孔子崇拝にひどく抵抗感を抱いた。

明治四十五年（一九一二）十三歳

神田区淡路町の開成中学に入学。父が久留米に転勤したため、浅草区左衛門町一番地の伯母（実は母政子の従姉）の所に移り、以後五年間暮した。この間に東京帝国大学生瀬古保次（後に貴族院書記長、賞勲局総裁になる）と起居を共にして学事指導を受けたが、この人から飲酒など教えられ、大きな影響を受けた。また住居の近くにあった市村座、柳盛座、開盛座などの劇場にさかんに出入した。

大正二年（一九一三）十四歳

夏休みに九州にゆく。

大正三年（一九一四）十五歳

十一月十八日、麻布笄町長谷寺で開かれた外祖父綱常（明治四十二年歿）の建碑式に参列し、発起人の一人森鷗外が碑文の解説をした時に初めて引見させられ、漢文学の大切なことを言われて、大いに感激したと言う。この頃から、永井荷風、上田柳村らの作品に心酔し、さらに「珊瑚集」や「海潮音」の幾篇かを更に漢訳したりした。

大正六年（一九一七）十八歳

父の命によってやむなく陸軍士官学校を受験したが、二日目の試験を受けなかったために合格を免れた。この一件が発覚して、父と伯母からひどく叱責された。

この頃から、浅草オペラの常連となり、ほとんど毎日数時間を公園で過した。

大正八年（一九一九）二十歳

伯母と共に下谷三崎町十番地（笠森稲荷の真向い）の新築の邸に転居した。

大正九年（一九二〇）二十一歳

スペイン風邪に感染、肺炎をおこしたが、危うく一命をとりとめた。その後、看護婦の付添いで慶應義塾大学に受験。合格して文学部予科に入学。荷風を慕って入学したものの、すでに三田を去っていたので、大いに落胆した。

国文学の小島政二郎、作文の久保田万太郎、クラス主任の戸川秋骨らから教えを受けた。同級には蔵原伸二郎、青柳瑞穂の両氏がいて、この二人とは一生親交を続けた。北村小松、石坂洋二郎、矢野目源一の諸氏も同級で交際があった。当時は鷗外に傾倒していた。十二月二十八日、父幸吉病死。

大正十年（一九二一）二十二歳

大久保百人町の仮寓で母と住み、同町に住んでいた青柳氏と日夕来往した。

大正十一年（一九二二）二十三歳

百人町の仮寓が手狭であったため、三崎町の伯母の邸を借りていたが、中野町本郷一〇八番地に新築されると、母と共に住んだ。この頃から三田文学にものを書き出した。

大正十二年（一九二三）二十四歳

母死去（四十三歳）。家産が自由になったために浪費生活がはじまった。古書もさかんに購入したが一生のうちでもっとも自由大胆な生活を送ったと言う。

大正十四年（一九二五）二十六歳

五月、慶大文学部卒業。卒業論文はダンテの神曲の研究であった。卒業と同時に佐々木忠次郎（元東京帝国大学教授・農学博士）の媒酌で坂東智恵子（後に孝宮和子内親王の乳人となった）と結婚し、中野の本郷に住居した。また与謝野寛の推輓で神田駿河台の文化学院の教壇に立った（同校には昭和十八年の閉鎖まで勤務した）。九月からは慶大予科講師となり漢文を担当した。十二月に長女檀（まゆみ）出生（与謝野晶子の命名）。文化学院に同じく教鞭をとっていた画家中川紀元と特別に懇意の仲になり、流連荒亡の日々を過したと言う。

昭和四年（一九二九）三十歳

長男正哉（まさや）出生（姉と同じく与謝野晶子の命名）。妻智恵子が内親王の乳人となったため、まる一年間別居生活を送った。その間の放埒を与謝野晶子にひどく叱責されたと言う。

昭和七年（一九三二）三十三歳

中野より麻布市兵衛町二十七番地の丹波谷に転居。

昭和十一年（一九三六）三十七歳
外務省在華特別研究員の選に当り、北京に留学することになったが、五月十六日、妻智恵子が急病で逝去した。その悲しみを抱いて、夏単身北京へ出発。北京孟公府箭桿胡同十三号の中日実業公司公館に仮寓した。音韻学者趙蔭棠と親交を結んだ。
昭和十二年（一九三七）三十八歳
十一月三日、北京三条胡同東亜病院長八木繁雄の妹薫（かおる）と婚約、中国流の許婚式を挙げた。年末近く熱河を経て満洲各地を旅行した。
昭和十三年（一九三八）三十九歳
四月、薫夫人と帰国、恩師戸川秋骨の媒酌によって結婚。慶大予科教授に任ぜられ、同文学部講師を兼任した（支那文学担当、隔年出講）。十一月末、世田谷区代田二丁目八五〇番地（現在の代田四ノ一三ノ一七）に移転。年末、次男燕児出生。
昭和十五年（一九四〇）四十一歳
夏休みを北京で過した。
昭和十七年（一九四二）四十三歳
四月より慶大文学部兼任講師で連年出講となった。夏休みに北京に行き、慶大支那文学専攻二年の芳賀日出男（現在民俗写真家。当時北京に居住）と共に中国演劇史の実証的調査（城内と前門附近の一部）に専念した。
昭和十八年（一九四三）四十四歳
一月より慶應義塾語学研究所所員（第二部）となった。
昭和十九年（一九四四）四十五歳
七月、檀結婚。十月、北京輔仁大学に客員教授として招聘され、一年間日本近代文学史・日中文化交流史・日本漢文学史を講義することになった。かたわらに仁井田陞博士と外城の廟を探り、中国演劇の実証的調査を継続した。また、同大学の教授で戯曲小説の研究では第一人者の孫楷第と親交を結び、閑談のうちから学問上大いに得るとこ

ろがあった。当時の住居は什刹後海の水辺にあり、孫氏から「池上草堂」の名を得た。
昭和二十年（一九四五）四十六歳
　終戦のため帰国できず、引続き輔仁大学に職を奉じた。
昭和二十一年（一九四六）四十七歳
　四月帰国。五月、慶大文学部予科教授に復職。慶應義塾外国語学校講師、文学部講師を兼担した。
昭和二十二年（一九四七）四十八歳
　三月、慶大文学部助教授に昇任した。
昭和二十三年（一九四八）四十九歳
　一月、慶大文学部教授に昇任した。二松学舎専門学校に出講（二松学舎大学になっても出講し、昭和二十七年に退職）。
　七月、三田文学会の水上滝太郎賞設置に際し、その選考委員の一人となった。
昭和二十四年（一九四九）五十歳
　一月、三田文学会の会長となった（昭和三十七年四月まで）。二月、三田文学会の戸川秋骨賞設定に際し選考委員の一人となった。日本中国学会が創立され、その理事に選出された（以後没年まで同学会の専門委員、評議員などの役員を歴任して、学会の発展のために大いに尽力した）。
昭和二十五年（一九五〇）五十一歳
　四月より清泉女子大学に出講（昭和二十八年三月まで）。
昭和二十六年（一九五一）五十二歳
　四月より慶大大学院文学研究科をも担当、中日比較文学を講義した（没年まで）。九月より東京文理科大学文学部漢文学科に出講した（昭和二十八年三月まで）。
昭和二十七年（一九五二）五十三歳
　一月八日より毎週一回、ＮＨＫラジオ第二放送の「番茶クラブ」のメンバーの一員となり文化社会時評を行なった

（昭和二十八年四月五日まで六十三回続いた）。四月より都立大学に出講（昭和二十八年三月まで）。

昭和二十八年（一九五三）五十四歳

森鷗外の「魚玄機」に取材した脚本「長安城の月」が、二月新派によって新橋演舞場で上演された（この劇は昭和三十一年二月にも東西歌舞伎によって大阪文楽座で上演された）。

昭和二十九年（一九五四）五十五歳

四月、日本美容専門学校（高田馬場）の創立とともにその校長となった（没年まで）。九月、学術文化使節団々員として中華人民共和国に招聘された。

昭和三十年（一九五五）五十六歳

四月より東京大学に出講、中国の芸能について講義した（昭和三十一年三月まで）。毎日出版文化賞選考委員となった（没年まで）。

昭和三十一年（一九五六）五十七歳

四月より成城大学に出講（昭和三十三年三月まで）。

四月、「牡丹亭還魂記」に取材した同題の東おどりが新橋演舞場において上演された。

六月、訪日京劇代表団（団長梅蘭芳）の来訪に際して劇の解説などに活躍し、多忙を極めて眼球出血をきたした。

六月二十三日からＮＴＶの座談会「雨・風・曇」のメンバーとなった（昭和三十四年まで）。

昭和三十三年（一九五八）五十九歳

芸能学会の副会長となり、機関誌「芸能」の編集委員にもなった（没年まで）。

昭和三十四年（一九五九）六十歳

四月より早稲田大学第一政経学部に出講（没年まで）。

十二月二日から、ＮＴＶ座談会「春・夏・秋・冬」のレギュラー・メンバーとなった（没年まで）。

昭和三十五年（一九六〇）六十一歳

四月、正哉結婚。十月四日より十二月二十七日までの十三回に及ぶＮＨＫ教養大学放送で「中国の小説」と題して

放送を行なった。また十月からNETの「女の座」（各界の女性を招いての対談）を担当した（昭和三十七年九月まで百回続いた）。

昭和三十六年（一九六一年）六十二歳

秋、松竹の歌舞伎審議会の委員となった（没年まで）。十月、軽度の高血圧症のため倒れ、病臥した。

昭和三十七年（一九六二）六十三歳

六月、「聊斎志異」の「陸判」に取材した脚本「秋灯記――美女と閻魔――」が松竹歌舞伎審議会第一回企画公演の一つとして歌舞伎座で上演された。

昭和三十八年（一九六三）六十四歳

読売文学賞選考委員（第十四回より）となった（没年まで）。

四月より桐生市桐が丘女子短大の講師（兼任）となった（没年まで）。

十月、慶大に久保田万太郎記念資金が設置され、それにともなってその運営委員の一人となった。

昭和三十九年（一九六四）六十五歳

一月二十日から十二回にわたってNHK・FM放送「朝の講座」で「中国文学十二講」と題して放送を行なった。

六月に痛風を病んだ（以後毎年のようにこの病気に悩まされた）。また十二月には脳血管痙攣のため倒れて病臥した。

昭和四十二年（一九六七）六十八歳

二月、燕児結婚。十二月十八日から二十二日まで五回にわたってNHKテレビの「女性の手帖」で「わたくしの唐詩選」と題して放送を行なった。

昭和四十三年（一九六八）

一月十五日、成人の日の記念講演のため朝から葛飾区総合区民センター体育館に行き、午前、午後の二回の講演の後、上野を経由して浅草に行き、古書を渉猟した後、午後十一時過ぎに浅草から帰途につき、タクシーの中で心臓喘息の発作をおこして、両国橋たもとの加藤病院に入ったが、十一時四十分、ついに永眠した。享年六十八歳二か

月。一月十九日、麻布長谷寺（永平寺別院）で葬儀執行。法名は醇信院凱南玄悌居士（凱南」とは竹添井々居士より授けられた号で、「詩経」の詩にもとづくものであり、生前に常用していた）。長谷寺にある奥野家の墓所に埋骨されている。

附　記

この年譜は先生御自身が生前に書かれたもの（昭和三十三年日本書房発行〈現代知性全集〉第七巻「奥野信太郎集」所収）を基礎として作った年譜（「芸文研究」第二十七号所収）を更に補筆訂正したものであり、特に実妹 玉利礼子、従弟 玉村竹二、直江広治、川添達人、芳賀日出男の諸氏より御懇篤な御指示をたまわった。

この年譜に誌したほかに北海道大学への出講があるが、その期日は目下不明である。執筆活動の詳細については「著作目録」との重複を避けて割愛し、執筆の脚本による上演やラジオ・テレビの放送方面の活動に限って記録した。

なお、慶大で担当した講義題目に不明のものが多いが、昭和二十一年以後に慶大で担当した学科目には、中国文学史、中国小説史、中国芸能史、中国現代詩概説、ゲーテと中国文学、菫園（けんえん）学派論、唐詩演習、明清作家論、明清小説論、魯迅研究、丁玲研究等があり、大学院では日中比較文学概説及び特殊（懐風藻研究、李賀研究等）を担当した。学内学生団体との関係も深く、映画研究会・カメラクラブ・観光事業研究会・スカウトクラブ・漫画倶楽部の会長をしていた。

（藤田祐賢　記）

（『奥野信太郎回想集』村松暎・慶應義塾編　三田文学ライブラリー　昭和四十六年六月十五日　より再録）